

prologue

情報通信革命と人文学の課題

下田正弘

1. 人文学にいまなにが起きているか

人文社会系の諸学は、文字資料、画像資料、調査・実験資料のいかに問わず、これまで長期にわたって伝統的表現形式によって記された史資料を直接に研究対象とし、内容を分析、解釈し、さらにそこで得られた成果を同様の表現形式に託して保存、継承してきた。しかるに1990年代以降、極めて高性能なコンピューターの普及と精緻に張りめぐらされた情報ネットワークの浸透とともに、多くの研究素材がデジタル機器を通して二進法によるデータに転記され、コンピューター上で再構成されたデジタル代替物として研究者に提供されるようになった。その結果、膨大な量の情報が従来とは桁違いの速さと精度によって処理され、そこで得られた成果は、紙媒体の制約を超えた多様な表現にもたらされ、かつて望みえなかった研究の可能性が開かれつつある。

ここで起きていることを、人文学の立場からいささか原理的にまとめ直すなら、身体が統合的に受容してきた情報を、コンピューターを用いて、五感の各機能に対応する膨大なデジタルデータに解体し、それらを再構成することによって、再び五感に対する対象物として現前化させるプロセスである。常識的な立場に立てば、これまでは、ひとが現実を読み解釈するという両者の関係が歴然とし、いわばシニフィアンとしての現実とシニフィエとしての身体とが判然と分かたれていた。けれどもいまや「ひとが現実を読む」という、主体と対象という二極によって構成される場において起きていたできごとが、一体化してその場から切り離されて外化され、新たな現実になっている。

ここで注目しておきたいのは、本来身体は諸機能であるとともに、それら機

能を通して起きるできごとを経験として統合する〈場〉でもあるのだが、ここでは機能のみが分離、抽出され、外界の対象に転換されている点である。外界を受容し、解釈してきた身体という場を、デジタル技術による機能として代替し、身体から分離し、身体に対峙させる。これによって、ひとの身体が解釈してきたはずの現実が、すでに解釈された二次的な現実に変じられている。それは純粋なシニフィアンではなく、身体機能が浸透した、その意味でシニフィエに浸されたシニフィアンである。

かつて Virtual Reality と名ざされ、いま Augment Reality と改名されつつある、コンピューター技術を通して出現しつつあるこうした現実とは、その質において、すでに二世紀以上にヘーゲルが『精神現象学』において示した意識と対象との関係や、半世紀ほど前から、ポストモダニズムにおいて顕在的に論じられた「テキストの外はない」というテーマに重なっている。かつて、テキストは解釈の対象であり、身体は解釈の主体であると、素朴に捉えられた時代があった。けれども、実は、テキストは解釈の対象であるとともに、解釈の結果でもあり、テキストには自他の身体がすでに浸透している。同様に、身体はテキストを解釈するのみならず、テキストから変容を受けるのであり、その意味でテキストによって解釈される対象となる。テキストの外部は存在しないという認識世界においては、テキストと身体との相互浸透性とその内実の分析こそが課題である。

このテーマに深く関係する「言語論的転回」が、歴史学を中心とする人文学に与えた影響は多大であり、いまだに人文学はその問題提起に十分に答えきれていない。けれども、情報通信革命による影響は、空前の規模と量とにおいて起きつつあるだけに、この比ではないだろう。その変化は、確かに直接に質に向かうものではないにしても、現実のすみずみに浸透してゆくゆえ、やがて質に影響をあたえざるを得ないものとなるだろう。

分析、解釈、表現という、研究を構成する行為以前を規定する新たなプロセスの出現によって、これまで所与の事実として問いを免れていた個々の研究素材は、特定の時代と社会の知的、技術的制約のもとに形式化された構成物として認識し直される必要が生まれている。長期にわたって、テキストを身体に対峙させるという形態に依存してきた研究方法は、いまや再考を迫られている。

このデジタル＝オンライン化のプロセスの出現は、事物やテキストに対し研究者が関与する方法を変えるにとどまらない。それは生み出された研究成果の公開、交換、利用の方法と過程を変容させ、さらに、印刷、出版、広報など、研究を取り巻く周囲の環境を広く改編してゆき、人文社会系諸学を支える基盤機構に変革をもたらしている。

社会の中でのひとと知識の対面の方法、あるいはむしろ、ひとと社会そのものの対面の方法を変革する、このデジタル空間においては、物理的時間空間の制約からの自由度ははるかに高くなり、Massive Open Online Course (MOOC)の導入にみられるように、大学の制度的機能と存在価値のありようにも看過しえない変化を起こしている。

現実の種々の機能の代替を企図し続けるこの学術空間は、いまや現実に置き換わろうとするところまで拡張されている。これに伴い社会や公共性をめぐる概念に変化が起こりはじめ、連動して人間の責任応答の様相も変わりつつある。情報化社会が直面するこれらの課題は、情報学の外部にあり、情報学には制御しえない問題である。この重要な課題を引き受け、解決に向けての提言をなすことが、長期にわたって人間と社会の問題に向き合い続けてきた人文社会系の諸学に期待されている。

2. デジタルの学知の特性

近年、欧米では諸学会は、デジタル化に対応する声明文を積極的に発表しはじめた（以下、詳細には下田正弘「デジタル化時代の人文学と中国研究——学術インフラの整備と国際学術ネットワークへの貢献について」『中国——社会と文化』34, 2019, pp. 5-19 参照）。その一例としてここではアメリカ宗教学会が発した声明文（Theodore Vial, Timothy Beal, Christopher Cantwell, Kristian Petersen, Jeri E. Wieringa, “AAR Guidelines for Evaluating Digital Scholarship,” September 2018）を引用しておく。そこにはデジタルの学知の特性が簡潔にまとめられている。

印刷——それは、単一の著者に帰し、テキストにもとづき、出版と同

時に完結してしまいがちである——とは対照的に、デジタルの学知 digital scholarship は、その長所を評価するさい考慮すべきいくつかの特別な性質をもつ。まず、デジタルの学知は、複数の機関の幾人かの研究者が関与するという点においてのみならず、コンピューター・プログラマー、ライブラリアン、あるいは学生さえもふくむさまざまな専門職を動員するという点においても協業的である。さらに、デジタルの学知は、多形態となり、さまざまなメディアの多種多様な形態や多種多様なプラットフォームでさえも同時に利用する傾向がある。研究によっては、分析のテキストあるいはナラティブ的形態は背後に退き、参照に向けた並置や直線的に流れる形態とは別の非直線的立論の形態によって寄与する視覚的あるいは聴覚的知識表現に席を譲る。最後に、デジタルの学知は、しばしば未完結である。多くのばあい、デジタルプロジェクトを立ち上げることは、研究の終わりではなく始まりであり、デジタルの学知は、たびかさなる管理保全とアップデートを必要とする。

さらに、代表的なデジタルプロジェクトは、他の研究者たちが先行研究のうえに構築し、融合させ、付加することができるよう、研究の成果、内容、データを、学者の開かれた共用に供することが普通である。たしかに著作権がある種の研究を促進するのに重要な役割を果たすことをも認めるものの、全体としては、研究へのオープンアクセスこそが重要な価値であると私たちは考えている。

これまで人文学の成果は、書物という形態の内部に結実してきた。それは、単独の著者による一方向に線的に流れる言説によって構成されている。研究の完成度はこのナラティブの完成度に比例する。さらにその言説は、学界における従来の議論に終止符を打ち、その書物の空間を完結させ、閉じてしまうことが期待されている。書物の場合、いったん出版されれば大がかりな改訂版を出すのは容易でない。研究の基盤となるテキストについて、これまで、一方で「ゆいづつ真正なテキスト」としての「決定版」を求めつつ、実際には出版されたものを de facto standard として受容してきた。いずれにも出版されたものの価値を長期にわたって固定的に認めようとする暗黙の要請が働いている。

これに対し、「デジタルの学知」が創出しつつある空間は、かなり異なっている。ウェブ上に展開される知識の基盤が、単独の著者によって作成されていることを期待する研究者はあまりないだろう。複数の研究者によって提供される方が資料への信頼度は高いと見なされる。さらにデジタル空間においては、異なる情報を同時に並置しうるゆえ、直線的な形式に沿って知識を構成する必要がない。テキストの改訂についても、ウェブ上での共同作業として進めれば、原理的には常時いつでも可能である。総じてこのデジタル空間におけるテキストは、固定され完成された存在から、生成過程にある流動的存在に変化する。ここにおいて「ゆいいつ真正なテキスト」という概念は、従来のありようではなりたちにくくなる。

事態はさらに遠くに進む。知が直線的な言説としてのテキストという形態から解放され、視覚や聴覚に同時に訴える方法をもって構成されるとき、そこにはいわゆる共感覚的 synesthetic 場における重層的、多面体的な知識の様態が生まれる。それは、コンピューター・サイエンティスト、ライブラリアン、人文学の専門家など、複数のものたちによって共同でつくりあげられる知のかつてない新たな形態である。このことは、そもそもあらゆる知が、さまざまな要素が何らかの文法のもとに編成されて生み出される、概念のネットワークであることに、改めて思い至らせてくれる契機でもある。

3. 具体的課題と解決の方向性

こうした新たな事態を迎え、いま人文学に与えられた具体的課題とその解決の方向性について、それぞれの分野が置かれている状況の相違に基づいてみれば、以下の六点を考慮しておく必要があるだろう。

第一に、固有の一次資料を有する研究——代表的には日本史や日本文学など——では、当該資料を学術的に高度な質で持続的使用に耐えうるデジタルデータに転換する必要がある。そのためには、人文学全領域のテキスト研究の標準規格である TEI (Text Encoding Initiative)、国際的画像共有規格である IIIF (International Image Interoperability Framework)、文字における国際規格である Unicode など、デジタル情報に関する国際標準技術の発展に主体的に貢献

し、標準化に積極的にかかわることによって、研究資料と成果の永続的利用を可能にする道を開きうる。それはあらゆる解釈行為を発生させる知識基盤となり、生み出された成果は再びその基盤に還流するゆえ、将来にわたって当該分野を裨益し続ける貴重な学術資産となる。

第二に、一次資料を外部に依拠している研究——例えば西洋を中心とする研究分野——においては、すでに公開されているデータベースの利用を通してその特性を分析し、研究成果と評価を提供者にフィードバックすることによって、当該データベースの質の向上に重要な貢献をなすことができる。ウェブ＝デジタル媒体においては、提供者と利用者との境界が解消され、よき利用者であることが提供者としての役割を果たすようになる。これは事物を直接に研究対象としていた時代にはほとんど望みえなかった研究への貢献方法であり、日本独自のデータベースを有することのない多くの分野が進むべき、重要な方向となる。ここでも上述の国際規格に則することは欠かせない対応となる。

第三に、形成されつつある新たな学術空間は、研究の結果のみならず、結果に至るプロセスによってその内実が構成されるため、プロセスの公開を学術的成果として評価しうる体制を整える必要がある。広く利用される知識基盤を共同で構築した成果や、それをウェブ上で公開した場合の成果を評価する体制を準備することは、個人による研究結果の紙媒体における提示のみを評価の対象としてきたこれまでの諸科学が直面する問題を解決するモデルともなる。

第四に、いま形成されつつあるこの学術空間は、諸学全体の知識ができるかぎり欠け目なく機能的に結ばれるネットワークとなることによってその価値が高められ、さらにその価値の向上を通して、同一空間のうちにある個々の専門分野の価値が高められてゆくという、相乗効果が期待される場である。この空間の質の向上は、人文学の個々の専門分野において果たしうるものではない。実際、欧米においては図書館における資料の専門家であるサブジェクトライブラリアンと、その研究者ネットワーク内部に養成される IT 専門家との連携によって実現されている。この現状を踏まえ、人文社会系諸学は、専門知を深化させるのみならず、ほかの諸学知との関係を把握しつつ学術空間全体の質の向上に努め、これまで図書館が果たしてきた将来に向けての成長を側面支援することが重要になる。

第五に、情報通信革命は、旧来の社会的インフラの一部を無効化し、新たなインフラを要求しつつある。これまで人文社会系の諸学が社会に受容される上で絶大な力を発揮した印刷文化とそれを支える高度な機能を持つ出版社の役割は、知の流通システムの変容とともに急速に限定されつつある。だがそれは、書物の役割の終わりを意味するものではない。反対に、その固有の使命がより鮮明なかたちで示されるようになるだろう。これまで研究成果の発信と保存を出版社と図書館に委ねてきた研究者にとって、今後サーバやクラウド上にそれらをいかに永続的に保存し利用する体制を、図書館や出版社と連携を取りつつ実現するかは、学問の将来を決める重要な問題となっている。人文系諸学を支える社会的インフラへの対応というこの問題に備えを開始することは、日本の人文学の将来を支える重要な仕事になるだろう。

第六に、最後に、以上の諸問題に対する備えがなされたとき、人文系諸学は、現代の情報化社会が直面するさまざまな問題に対し、単に理念的、観念的な立場からではなく、情報空間の現実化という重要な経験を踏まえた上で実効性のある提言ができるようになるだろう。これは人文学が情報学に対して為し得る貴重な貢献となるはずである。

こうした対応は、人文学がこれまでの研究や教育のありようをさらに深化させるためになされるものであって、ただ捨て去るためになされるのではない。デジタルの学知にかかわる課題解決は、これまで進められた人文学の研究の在り方と、統合的なかたちで解決されなければならない。前節で引用したアメリカ宗教学会の声明文は、以下の重要な一節を続けている。

このガイドラインを設けることによって、私たちはデジタルの学知が異なった基準をもたされるべきだと考えているのではない。媒体のいかんにかかわらず、「アメリカ宗教学会の使命」に概要として示されているように、学知たるものは、「鍛えられた省察」disciplined reflection と「批判的な検証」critical examination に従事すべきである。ここには一次資料やデータに対して厳格に分析し説明すること、評価の定まった学術的人文学諸業績に対して持続的にかかわりつづけること、研究の議論、方法論的な選択、

独自の貢献について明瞭に表現することなどがふくまれている。つまり質の高いデジタルの学知は、質の高い学知なのである。以下に推奨するものは、デジタルの学知を、より広範な研究の価値の対話のなかに位置づけるためである。それらは対話への招待であり、不変の要求項目などではない。

本書は、科研費基盤研究 (S) 「仏教学新知識基盤の構築——次世代人文学の先進的モデルの提示 (研究代表者: 下田正弘 課題番号: 15H05725)」(2015—2018年)の成果をまとめたものである。このプロジェクトでは、デジタル学術空間をつくりあげる方法について、仏教学のかかえた課題をさまざまな角度から追究しながら、次世代人文学のモデルを提示しようと試みた。人文学の展開には、新たに生まれつつあるデジタルの学知との対話が、いまや不可欠なものとなっている。本書におさめられた諸論は、いずれも仏教学のさまざまな専門から、それぞれの文献を対象として課題を提起するとともに、その解決の方向を示唆している。すでに公開されている本プロジェクトの基幹データベース SAT2018¹に加え、本書が新たな時代の人文学の先駆けとして関係諸学に資するところがあれば、本研究プロジェクトの所期の目的は達成されたものと思う。

注

1 <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php>